



時には、こんな旅に出よう。 北の食を、もっと身近に。 体験型観光のススメ

オホーツク編

道内各地へ美味しいものを求めて旅をするのも楽しいが、ただ食べるだけでは終わらない『北海道の食』にまつわる体験型観光をオススメしたい。地域の食や取り組みを体験メニューを通して知ること、旅の記憶は一層深みを増していく。第2弾の今回は、オホーツクエリアへと足を延ばしてみた。網走では活気ある水産加工場で地魚をさばき、北見ではハーブ農園でブレンドティーづくりに挑戦。さて、どんな体験になるのか――。



企画・文
北海道6次産業化地域プランナー
ばんや りくこ
萬谷 利久子

生産者の商品開発、レストランなど「食×農×観光」をサポートする北海道6次産業化地域プランナー。支援機関の専門家として企業のマーケティング、行政・DMO観光分野の食コンテンツづくりを行う。北海道大学メディア観光学院デスティネーションマネージャー。米国NTI認定栄養コンサルタント

旅先のみならず帰宅後も楽しめる、二度美味しい旅

今回は最初の目的地である網走市まで、札幌から車で約6時間の道のりです。まずは道央自動車道で旭川へ向かい、のんびりと休憩をとりながら旭川・紋別自動車道、国道333号、そして国道39号を通過して一路網走へ。四季の流れや美しさを感じ、深呼吸するように開放感を味わえるのが、このエリアの魅力です。

私が訪れたのは7月。今年の夏も気温が高かったとはいえ、この辺りの海風は涼しく、ハマナスの花が咲き誇っていました。

体験メニューを提供してくれたのは、網走市の水産加工会社と、北見市のオーガニックハーブ園です。話題

のスイーツ発祥の地にも足を延ばしました。

旅で出会った皆さんは、自分達のマチをもっと元気にしたいという思いを持つ人達です。体験メニューを通して、商品や企業のPRだけではなく、地域のファンを作りたいという気持ちが伝わってきました。

リアルな現場のストーリーに耳を傾け、ホスピタリティあふれる人達に出会うことで、オホーツクの旅は何倍も面白くなるはずですよ。



おすすめ体験スポット

1

網走市で 干物づくり体験



キンキはトゲが多いので取り扱いが難しく、体験メニューでは通常、ホッケをさばく。キンキの干物も後日、自分がさばいた干物と一緒に郵送してもらえる

大丈夫かな？

そうそう、
お上手ですよ



ベテランの職人さんに教わりながら、キンキをさばっていく

自分でさばいた干物は格別の味

オホーツク海がすぐ目の前にある網走市の「増田水産」。水産加工場の売店には、水揚げされたばかりの活きのいい魚介が並んでいます。わさび醤油でホタテを試食させてもらおうと、思わずうなるほどの鮮度にテンションが上がります。

いざ、加工場での体験へ。エプロンにゴム手袋、長靴と帽子を身につけ、いっばしの職人のいでたちです。

ここで体験するのは、魚の干物づくりです。いつも職人の皆さんが魚をさばっている場所で、一緒に作業を進めるという臨場感たっぷりのお仕事体験。見慣れない「かっちゃき」という道具で魚のうろこを取り、背中から出刃包丁で3枚に開きます。今回の主役、キンキは固いトゲがたくさんついているので、手にささらないように用心深くさばきます。頭は固く、ぐぐっと力を入れても包丁が入りません。身は柔らかく包丁使いをしくじると、ぼそぼそになるという難しさ。

何とか3枚におろした後は、塩水に漬けます。その後、清潔な乾燥室で干され、完成した干物は後日自宅に送られてきます。しっかり時間をかけて干すことが大事なのだそう。

干しキンキは「焼き」がオススメと聞き、我が家のバーベキューコンロに炭をおこして焼きました。ふんわりと膨ら

んだ身の食感と皮の香ばしさは格別です。ところどころ自分が入れた包丁のつたない跡を見つけることができ、くすっと笑ってしまうのも旅の思い出です。

もう一つ印象深かったのは、オホーツク海を知りつくす増田社長のレクチャーです。流水の話、海的环境、魚の価格の話などクイズやジョークを交えて楽しく聞かせてくれます。カメラが趣味という社長のインスタグラムは、道外・海外の人からも広くフォローされており、網走まで会いに来る人もいます。社長の強力な発信力は、網走の観光集客にも大きな力となっています。



左／無事にキンキとホッケをさばきました！

右／知識豊富でトークが面白い増田社長

『北国の港町で学ぶ「旬の魚」のひものづくり』体験

料金(1名あたり)／20,000円(税込、大人・子ども共通)
(キンキ・ホッケの干物代金・送料を含む)

定員／2～8名

所要時間／約1時間

開催時期／通年、毎週木曜

住所／網走市港町6-7「増田水産」

予約／実施日の5日前まで

連絡先／網走市観光協会(TEL.0152-67-5762)

おすすめ体験スポット

2

北見市で
ハーブの体験講座

ハーブティーブレンド体験
では、瓶に貼るオリジナル
のラベルも作ってくれる



北海道産100%のオーガニックハーブ

北見市の中心街から車で15分。雑木林を抜けると、ハーブ畑に囲まれたログハウスが現れます。農業法人「香遊生活」は、30年前から自社有機の農場でオーガニックハーブを栽培しています。夏でも冷涼で湿度が低く、昼夜の寒暖差が大きい気候がハーブ栽培に適しているのだそうです。

ここで最初に挑戦した体験メニューは、「オリジナルハーブティーブレンド体験」です。まずは専門家からそれぞれのハーブの特徴や効能を学んだ後、今の自分の状態について、悩みや希望などをチェックするカウンセリングシートを記入。それを見ながら植物療法のセラピーを用いてハーブをブレンドしてもらいます。

私の場合は、いつもせわしないので「リラックス」のハーブブレンドです。自分好みのハーブを足すこともできるので、パイナップルのような香りのオホーツカモミールと、カラフルなコーンフラワーを加え、「マイハーブ」が完成。イギリス伝統のリバティプリントのような色合いに仕上がりました。

もう一つの体験メニューは、「ハーブスチーム浴」。韓国伝統のよもぎ蒸しスタイルで、ケープにすっぽりとくるまれた姿で椅子に座り、炭で加熱した13種類のハーブの蒸気を受けます。30分もすると汗が額からも腕からも流れ落ちます。デトックスしたように身体が軽くなり、汗はさらさらです。体験後は真っ青な色の「マロウ」茶を頂きました。風に揺れる花を見ながら自然の中で味わうハーブティー。静かに羽を休め、エネルギーチャージできますよ。



13種類のハーブの香りを堪能しながら、体はじんわりと温まる



左／自社農場で有機栽培した多彩なハーブ

左下／一面にハーブ畑が広がる

風景に溶け込むログハウス

右下／無農薬、除草剤を使わない

など創業時からの理念を大切に

守る代表取締役の舟山亮真さん



①オリジナルハーブティーブレンド体験

②ハーブスチーム浴体験

料金(1名あたり)／①3,000円(税込) ②6,000円(税込)

定員／①2～15名 ②1～4名

所要時間／①約1時間 ②約30分

開催時期／①②通年

住所／北見市柏木14-3

予約／①②希望日の4日前まで

連絡先／香遊生活(all@koyu-seikatu.co.jp)

ちょっとだけ足を延ばして…

津別町

道の駅あいおい

網走と釧路を結ぶ国道240号沿い、津別町にある「道の駅あいおい」。年間30万人が訪れるこの看板商品は「クマヤキ」です。その愛らしいデザインがSNSで拡散し、全国から聖地巡礼のように訪れる人があとを絶ちません。デザインを手がけたのは地元の造形作家でイラストレーターの大西重成さん。東京で活躍後、故郷に戻り、まちづくりに尽力されています。

「クマヤキ」は素材や味づくりにもこだわりがありました。相生地区には100年続く老舗の荒井豆腐店があり、その豆乳を使って何か作りたいと生まれたのが、この商品でした。数種類の大豆をコトコト炊いて豆乳を作り、鍋で火にかけゆっくりかきまわしながら手作りした豆乳クリームを詰めています。

道の駅のマネージャー伊藤さんは、地域の企業と一緒に創造することがモットー。町民に焼き手を担ってもらうことで人手不足を解消したりと、わが町のヒット商品に対する誇りと郷土愛が伝わってきました。緑あふれるロケーションと古い駅舎のある道の駅は、今や「クマヤキ」ワンダーランドになっているとしています。



重量感ある「クマヤキ」のお腹には、地元の豆腐店で生み出される逸品の豆乳クリームが詰まっている



「クマヤキ」を求めるファンが絶えない、道の駅あいおい

住所／網走郡津別町字相生83番地1
TEL／0152-75-9101
営業／9～17時(火曜定休)

囚人が切り開いた「中央道路」

旅先に見つけた道の物語 — 北見市 —



鎖と共に葬られていた囚人達を慰霊するべく、昭和51年に端野町で建立された「鎖塚供養碑」



上／明治44年頃の端野町の屯田兵村を再現したジオラマ
下／道路工事に駆り出された囚人達に結ばれていた鎖や鉄丸(再現)。いずれも「端野町歴史民俗資料館」所蔵

歴史ある街道には、数多くの物語が秘められている——。現在、旭川と網走を結び、オホーツク圏の動脈となっている国道や道道の前身となったのが、明治20年代に開通した「中央道路」である。当時北海道庁長官であった永山武二郎がロシア軍の南進に備え、札幌～旭川～網走間の道路開通を急がせていた。工事には道内各地の集治監の囚人達が過酷な開削工事に動員された。

中でも明治24年春から着工した網走～北見峠の約161kmは、同年の冬までに完成させたという突貫工事で、従事した釧路集治監網走分監(のちの網走集治監)の囚人に約200人以上もの死者を出し、北海道の道路史上最も悲惨な事例とされている。今回、萬谷さんも旅の道中で訪れた北見市の「鎖塚供養碑」や「端野町歴史民俗資料館」が、その史実を今に伝えている。